

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

| | |
|-------------------------|---|
| タイトル Title | 国際地域文化序説 |
| 著者 Author(s) | 柳原, 邦光 |
| 掲載誌・巻号・ページ Citation | 地域学論集 : 鳥取大学地域学部紀要 , 15 (1) : 57 - 69 |
| 刊行日 Issue Date | 2018-10-31 |
| 資源タイプ Resource Type | 紀要論文 / Departmental Bulletin Paper |
| 版区分 Resource Version | 出版社版 / Publisher |
| 権利 Rights | 注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted. |
| DOI | |
| URL | http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6328 |

国際地域文化序説

柳原 邦光

Introduction to Global and Regional Cultures

YANAGIHARA Kunimitsu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第15巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.1

平成30年10月31日発行 October 31, 2018

国際地域文化序説

柳原邦光*

Introduction to Global and Regional Cultures

YANAGIHARA Kunimitsu*

キーワード：自然、近代、国民国家、世俗化、グローバリゼーション、関係、地域、地域学

Key Words: nature, modernity, nation-state, secularization, globalization, relationship, region, regional sciences

I. はじめに

鳥取大学地域学部は 2017 年度に人文社会科学系の 3 コースからなる学部へ改組された。筆者は「国際地域文化コース」の所属であるが、このコースは難しい課題を抱えている。コースの目的を適切に表現する名称を見出すことができなかつたからである。「Studies of Global and Regional Cultures」という英語表記の方が内容を想像しやすいかもしれない。もちろん、重要なのは、学生たちに何を提供できるか、である。教員は「国際地域文化」の内実をつくり、明確に表現しなければならない。そのための指針は改組時にコースで検討・合意した文書に見ることができる。

現代社会の構造と文化的特質を理解するとともに、人や文化がグローバルに移動するなかで、国や地域で歴史的に形成されてきた文化が多様な文化と出会い、選択・受容・反発・混淆を通して絶えず変化していくことなどを学ぶ。そして芸術文化を含む様々な文化の織り成す関係性や多層性とその変化、それらが生活においてもつ意味を理解し考察するための知識や能力を修得する。こうした学修によって、日本を含む世界の様々な地域で、異質性を理解し、創造性を活かして、「一人ひとりの生活と生の充実」「つながりの創出」を実現していくために必要な知識や技法、言語能力や現地感覚・現場感覚を身に着けた人材を養成する。そのために、考古・歴史・言語・文学を軸に地域や日

本の文化を学ぶ「日本の歴史と文化」、現代社会の価値観や制度、様々な文化の出会いと創造などについて学ぶ「グローバルな文化と地域」、文化の異質性を繋ぎ、新たな見方や生き方を生み出す「創造性」の社会的役割を実践的に学ぶ「創造性とコミュニティ」という 3 つの学修プログラムを設定し、キャリアデザインも視野に入れた履修指導の明確化を図る。

「国際地域文化」を具体化する重要な舞台の 1 つは、1 年生必修科目「国際地域文化序説」(後期開講)である。この授業で学生たちに何を伝えるのか、授業をどのように組み立てるのか、1 年生にもわかるようにするにはどう表現すればいいのか、など、授業全体を視野に入れて工夫しなければならない。

このような課題への取り組みは初めてのことでない。2004 年に地域学部が創設されたとき、学部必修科目として「地域学入門」(1 年生)と「地域学総説」(3 年生)が新設された。それ以来、学部教員は 2 つの授業を企画し運営しながら「地域学に形を与える」努力を続けてきた。というのも、「地域学の確立」が地域学部を設置した目的の 1 つだからである。私たちの試みはときに「地域学原理主義」と揶揄されたが、全力で取り組んできた。その成果の 1 つが、筆者を編者の 1 人として学部教員で執筆した『地域学入門』である¹⁾。筆者は、「国際地域文化序説」での努力もやがて何らかの成果を得て、「地域学」のなかに新たな視点と領域を切り開くことになるかと期待

*鳥取大学地域学部地域学科

している。しかし、そうなるには、授業をするだけでなく、授業での取り組みと成果、様々な「気づき」をきちんと記録すること、それを分析し文章化して、授業レベルから研究レベルへと深める努力を重ねていくことが欠かせない。本稿はそのための第一歩である。

これから、最初に、筆者が2018年1月30日の授業で行った「総括」の講義原稿を、註を付して、掲載する。次に、授業は4つのパートからなっていたが、このように構成した意図を示す。そして今年度を振り返り、次年度以降の「国際地域文化序説」の方向性について提案したい。

II. 総括「人はどのような関係を結んで生きてきたのか」

(1) はじめに

今日は「国際地域文化序説」の最終回ですので、「まとめ」として13回の講義から全体として何がいえるのか、考えてみます。

初回で少し話したと思いますが、確認しておきたいのは「序説」が何を目指しているか、です。それは「国際地域文化コース」の到達目標を具体的な形にして提示することでもあるのですが、なかなか難しい課題です。私自身は、このまとめを「私たちが何を視野に入れておくことが望ましいのか」を提案する機会にしたいと思います。この意味で重要なのは、私たちが心の中で想起できることを広く深くすることです。もちろん、他の方がされれば、また違った「まとめ」があるはずですが、そういうつもりで聴いてください。

「序説」は実質的にテーマをもった4つのパートから成っていました。「自然と人間」、「近代とは何か」、「東アジアと近代」、「グローバリゼーションと社会的包摂」です。これから各パートを簡潔にまとめながら、私の理解を示すことにします。

(2) 自然と人間

最初に「自然と人間」です。このパートは考古学の中原先生と高田先生の担当でしたが、ここで考えたかったのは、「人間は自然とどのような関係を結んで生きてきたのか」ということです。「生きる」とは、まずは「いかにして生存を確保するか」という問題です。

ところで、私たちは種としては「ホモサピエンス」で、だいたい20万年くらいの歴史があるようです。「ホモサピエンス」は、10万年前に東アフリ

カを出発してヨーロッパやアジアに広がり、日本列島には4~3万年前に辿り着いたとされています。当時は狩猟採集生活でした。つまり、自然にあるものをもって食べました。そのため、ずっと同じ所に住むのではなく、食料を求めて移動しました。高田先生は「遊動」という言葉で、移動の理由を5点ほど紹介されました。安全性と快適性の維持、経済的側面、社会的側面、生理的側面、観念的側面です。私は、全部をひっくるめて、「遊動」を、食料の確保だけでなく、できるだけ対立を避けて穏やかに無事に生きるための知恵だと理解しました²。

しかし、その後、漁撈などから定住生活に移行し、農耕も始まりました。昔の教科書は狩猟採集から農耕と定住への移行を人間の進歩と表現していたように記憶していますが、そういう簡単な話ではないようです。「定住」して穀物などを栽培することで、確かに大量の食料を手に入れることが可能になり、人口が急激に増加しました。しかし、狩猟採集生活の利点のすべてを失って、それまでにない困難を抱えることにもなりました。ただあるものを採って食べるのではなく、畑や田んぼで作物をつくって、どんどん増えていく人口を養わなければなりません。それで、収穫量を増やすために、畑や田んぼで四六時中働くことになりました。働く時間がとても長くなったのです。また、農耕はそもそも人間が生活しやすいように環境を人の手で変えていくことです。当然のことながら土地から離れることができません。そのため「災害」に見舞われることもありました。自然のなかで起こることは「自然現象」ですが、人間がいれば、「災害」になることもあります。つまり、農耕と定住の開始は、「自然災害」と向き合うことを人間に運命づけたのです³。

この点については、中原先生が「自然環境の人の生活への影響」として詳しく紹介されました。「地域学入門」での先生の講義も併せて考えてほしいのですが、人の生業と文化は、土地の条件や気候、植物資源や動物資源、要するに自然環境に大きく影響されています。自然環境自体、気候変動などで常に変化していますので、それに伴って生活様式も変化します⁴。気候が変わったためにそれまでの暮らし方が成り立たなくなることもありました。たとえば、三内丸山遺跡がそうです。また、農耕をするために、居住地を小高い所から水の集まる低地に移したことで水害など災害や病気の危険性が高まりました。実際、何度も災害にあっていますが、それでも住み続けたケースが少なくないようです。このような気候変動や災害と人の暮らしとの関係を含めて、「自然と

人間の関係」を私たちはよくよく考えてみるべきだと思います。

ということで、この点について、もう少し考えてみます。高田先生は松尾芭蕉の『奥の細道』や永六輔さん作詞の「遠くへ行きたい」を紹介されましたが、覚えていますか。確かにふと「どこか遠くへ行ってみない、旅に出たい」と思ったりするのですが、あれは遠い祖先の狩猟採集生活の習性が私たちの身体に残っているということでしょうか。

それから、現代の生活習慣病に糖尿病がありますが、その原因の1つはたくさん食べることができるようになったことです。これは人間の歴史ではごく最近になって見られるようになった現象です。少ない食べ物でも何とか生きていけるように私たちの身体はできているのですが、今日では必要以上のカロリーを大量に摂取している上に、産業や科学技術の発達のおかげで身体を動かさなくても生活できるようになりました。私たちの身体は飢えには強いのですが、食べすぎにはうまく適応できないのです⁵。何がしたいのかといえば、何万年の間、身体で覚えてきたことが今も私たちのなかに残っているのではないか⁶ということです。

それからもう1つ。2011年に東日本大震災がありました。地震と大津波で大変な犠牲を出しました。あれから「復興」が進んでいるはずですが、興味深いことが起こっています。津波で犠牲を出したにもかかわらず、元の場所で、海の見える場所で暮らし続けようとする人たちがいるのです。行政は、「合理的に」考えて、すなわち「危険であること」を根拠として、高台への移転と巨大防潮堤の建設を進めています。住民たちはなぜ「非合理」と思えるような判断をしたのでしょうか。

この問題については、植田今日子さんの論文「なぜ被災者が津波常習地へと帰るのか―気仙沼市唐桑町の海難史のなかの津波」が参考になります。植田さんは次のようにいいます。「人びとにとって被災後なお海のもとへ帰ろうとすることが“合理的”であるのは、海がもたらしてきた大小の災禍を受容することなしに、海がもたらしてくれる豊穡にあずかることはできないという態度に裏打ちされている⁷。」

私は、このような住民たちの判断、自然と向き合う姿勢の根底には、この地の人々が、長い間、海と関わってきた生活の積み重ねを通して、身体でいのちでつかみとってきたものがあるのではないかと、と思っています。

この点について、参考になる文献をもう1つ紹介します。海の見えるところに戻った住民の1人で、

今もカキ養殖をしている畠山重篤さんの『鉄が地球温暖化を防ぐ』（文芸春秋、2008年）です。日本の国土の約7割は森林だそうですが、この本は、自然の「いのちの循環」のなかで、山と森と水が人々の生活をいかに支えてきたのか、そして自然と向き合ってきた人々の知恵がいかに深いか、教えてくれます。山と森は雨水を保ち、水が森の栄養分を川や湧水になって里にもたらし、海に運びます。それが里や海の様々な生き物を生かし、その恵みをいただいて、人も生きてきました。「いのちの流れ」、「循環」のなかに人のいのちもあるのです。山と森と水を大事にし、自然に感謝する暮らしが、深い知を生んできたのです。

私たちはつい忘れてしまいがちですが、人間は自然と深く関わって、自然に学びながら知を紡ぎ出して、暮らしてきたのです。文化は、自然と暮らしとの関係から、深層から、考えるべきだと思います⁹。

(3) 近代とは何か

次は「近代とは何か」です。「自然と人間」という観点からいえば、近代社会は西欧の風土のなかで生まれたのですから、その思想や論理、原理原則は「ヨーロッパ・ローカル」というべきものです¹⁰。ところが、風土を異にする日本でも、憲法をはじめとして様々な制度の骨格となっています。ですから、「なぜそうなったのか」を含めて、「近代とは何か」は、私たちにとって、避けることのできない、重要な問いなのです。

このパートで最初に講義したのは私で、主に近代世界システムと国民国家との関係について紹介しました。この2つはセットになっていて、16世紀以降、「中核」と「周辺」という支配=従属関係をともなう「世界経済」をつくってきました。だからこそ「ヨーロッパ・ローカル」であるにもかかわらず、普遍性の衣をまとい、グローバル・スタンダードになれたのです¹¹が、今、この「構造」は揺らいでいます。この問題については、今日の講義の最後のところで検討することにします。

ここでは、私の講義の補足をしておきます。フランス革命では、あらゆる束縛を断ち切って自由になった個人が、「自由と平等」という「普遍的な理念」を共有して国民を形成しようとししました。国民を創るのは、歴史でも、伝統でも、宗教でもなく、普遍的な理念です。「普遍的」とは、絶対に正しい真理とされるものであって、フランス人だけでなく人類全体に当てはまる、ということです。もう一つ重要なのは「個人」です。「個人」は、身分・集団・地域な

どあらゆる束縛を断ち切ったのですから、結果的に同質的な存在になります。そういうものとして共和国という国家と関係を結ぶとされたのです¹²。

それにしても、かなり抽象的な話ですので、これでは「民衆」といわれた普通の人々を共和国に結集できないと思うのですが、革命家たちは違いました。人間の知性・理性に絶大な信頼を寄せて、法と制度と教育によって、人間は自ら幸福を実現できるという、信仰に近い確信をもっていました¹³。これは啓蒙思想¹⁴ですが、今日では「人間中心主義」として、しばしば批判されてもいます。

以上がフランスの場合ですが、内藤先生の紹介されたチェコの場合は、様子が随分異なります。世界システム論でいえば、フランスは「中核」、チェコは「周辺」に位置づけられます。チェコの人たちは、民族存亡の危機感から、18世紀末から19世紀前半にかけて、文化による「民族再生運動」を通して自立した政治的存在になることを目指しました。この動きは、当時の国際関係のなかで、複雑なプロセスをたどりしました。

重視されたのは「言語」と「歴史」で、それらを創出することで「近代的なチェコ国民」を創りだそうとしました。興味深いのは、以下の2点です。1つは、運動以前にチェコの知識人とフォークロアの世界に生きる農民層との出会いがあり、チェコ語やチェコ文化を見直す動きが生じていたことです。民衆的基盤を得たことが「文化的復活」を可能にしました。

他にもう1つの条件を満たすことが必要でした。チェコ人の言語と歴史を、普遍性を主張するヨーロッパ文化に接続すること、「西欧的で自由主義的で人道主義的な基盤」を与えることです。そうしてエスニックな「民族」を近代的な「国民」に変えようとしたのです。そのために様々なものを動員し利用しました。例えば、宗教改革の先駆けとしてボヘミアのヤン・フスを持ち出したことです。このようにしてヨーロッパの一部として歴史を担ってきたことをアピールしなければ、ヨーロッパの国際関係のなかで承認されないと考えられていました。この点に、時代の大きな力学とチェコの置かれた状況の厳しさを感じました。

「近代とは何か」を考える際に、避けて通ることができないのが宗教の問題です。ここは中先生の担当でした。私の理解も加えて紹介しますと、近代社会と宗教との関係について考察するとき、もっとも有力な包括的理論として登場したのが世俗化論です。世俗化論とは、近代化が進むにともなって「宗教的

なもの」が退いていき、「宗教の社会的意義の喪失」が生じる。つまり、社会の諸制度が宗教の支配から離脱してゆき、人間の意識や思考も合理化されていく、という見方です。宗教は制度においても文化においても役割と影響力を小さくしていくのです。「宗教の衰退」と表現されることもあります¹⁵。

人間が自らの理性と知性、合理性を信頼して、神ではなく人間の力で幸福を増進する方向に社会を変革していく時代。近代をそういう時代だと考えれば、世俗化論は妥当な理論に見えます。実際、かつてはそう考えられていました。ところが、こんにちでは様々な批判がなされています。

たとえば、「宗教の衰退」ではなく、「宗教の再組織化」や「宗教の個人化」（宗教が個人の選択の問題になっているということ）が進行している、さらには「宗教復興」「宗教の復讐」という主張さえあります。世俗化論を肯定する場合も、「宗教の衰退」はヨーロッパに限られるのではないか、世俗化論はヨーロッパの経験をそれ以外の世界に一般化しようとしているのではないか、という疑問などが提示されています¹⁶。つまり、近代以降、宗教がどのような役割を果たしているか、さらには果たしうるのか、について、定まった見解はないのです。それほど宗教の評価は難しいのです。逆にいえば、今日でも、宗教や「宗教的なもの」に関するこのような問いは無視できないのです¹⁷。

「近代とは何か」をまとめてみます。まずは国民国家です。フランスとチェコの例からおわかりのように「国民」とは創出すべきものです。国民に相当するような確たる実体があったというよりも、国家としての凝集力、大きくまとまる力ですね、それを得るために「国民」（国民の一体性）をつくり出す必要があったのです。その理由の一つは、世界システムの中で競争に勝ち抜くためです。何によって国民を創るのかは、国によって異なります。フランスの場合は、「自由と平等」という理念でした。チェコは言語と歴史ですね。このように何かを中心に国民を国家に向けて結集することを「国民統合」といいます。

ヨーロッパでは、国民統合において宗教が一定の役割を果たしてきました。事実、つい最近までキリスト教を国家宗教にしていた国が驚くほどたくさんあります¹⁸。世俗化概念とそれをめぐる議論が重要なのは、19世紀以降、国家の制度から宗教が退場し、教会に定期的に通う信者も減少していくなど、目に見える現実があったからです。宗教に頼らずに社会の凝集力を確保できるかが問われてきたのです¹⁹。

ここで国民国家の役割をごく簡単に確認しておきます。国民国家は国境で領域（領土）を画定し、国籍で成員、つまり国民を決定して、この枠の中で様々な制度によって人々の安全と生活を守り、幸福の実現を図ります。何かを共有する同質的な「個人」と、領土の範囲内のことは主権者である国民で決定する「国民国家」、この2つが近代社会の大前提なのです。

世界システム論についてもひとつ確認しておきます。こんにちでは「グローバリゼーション」が盛んにいわれるようになりましたが、重要なことは、ずっと以前に世界は経済的に一体化していたことです。近代世界システムは19世紀最後の四半世紀に入ると、地球全体を覆いました。世界の経済的一体化は、東アジアを含めて、19世紀に完了していたのです²⁰。

(4) 東アジアと近代

東アジアについては、久保先生の源氏物語の分析が面白かったですね。私の興味を引いたのは、源氏物語も中国の漢詩文の影響を受けていて、源氏物語の読み手が、ある言葉や記述に触れたとき、直接には語られていない漢詩文の世界をいわば自動的に想起した、ということです。平安貴族の世界の背後には、漢詩文の世界があったのです。もちろん、そのまま丸ごと受け容れたのではなくて、先生の表現でいえば、「翻訳」しながら、ということです。

この指摘は、日本がそれほどまでに大陸から文化的影響を強く受けてきたことを物語っています。日本は中国を中心とする東アジア世界のなかにありました。西欧近代の荒波に襲われるまで、東アジアはどのような秩序からなる世界だったのでしょうか。柳先生の講義はこの問題を取り上げました。

東アジアの秩序観を示すキーワードは、「華夷秩序」です。中央に文化、すなわち儒教をもつ「華」があって、その周辺に文化をもたない「夷」がありました。「華」と「夷」、2つを合わせて「天下」です。「天下」の秩序は、「中心」から「周辺」へ、高いところから低いところへ統治者の徳が広まることによって保たれる、とされていました。

「華」を統治したのは、「天命」を受けた「天子」です。「天命」は儒教的な徳の高い人に下るとされていましたので、天子の支配＝儒教支配が広がっていくことが理想とされていました。「華」は徳の高い天子が支配するときは広がり、そうでないときに縮まりました。また、「夷」であっても儒教を受け容れれば「華」になりました。したがって、「華」と「夷」の境界は流動的でした。ここには、私たちにお馴染み

の平等の観念も「支配と被支配」という発想もありません。

実際には、中国は常に北方の武力に優れた遊牧民の脅威にさらされており、王朝が敗北して、「夷」が「華」を支配することもありました。しかし、「夷」は漢人の世界観を取り入れ、「華」として振る舞いました。この場合、「天下」の構成に変化が生じました。通常は「華夷殊別」で、「華」は儒教中心の漢族の世界でした。しかし、異民族が支配した時は「華夷一家」で、「華」は「徳」とされ、これにより異民族中心になることができました。「徳」の高さを証明したのは、領土の広さでした。

清朝の時代には、モンゴルとチベットを領土に加えて、中国史上最大の領土になりました。しかし、モンゴルとチベットの世界観は「華夷秩序」ではなく、「施主帰依処」と「衆生転聖王」でした。「施主」がモンゴルで、「帰依処」がチベット（ダライラマ）です。「衆生転聖王」、すなわち支配者が仏法を輪のように回しながら、仏法をもって衆生を救うという世界観です。

このため清朝の皇帝は悩みを抱えることになりました。問題は、華夷思想とモンゴル・チベットの世界観との折り合いをどうつけるか、です。それで、チベット向けには「施主帰依処」関係、漢人向けには「征服」という形で自らのモンゴル・チベット支配を表現しました。つまり、満洲人、漢人、チベット人、ウイグル人、モンゴル人からなる多民族国家の統治者として、漢族には漢人の「皇帝」、モンゴル人には「ハン」、チベット仏教徒には「最大施主」という形で、3つの顔を使い分けたのです。それぞれの秩序観を尊重して、そのなかに自らを位置づけるという方法です。その結果、清朝の一元的統治と多様な文化の共存とを実現することができました。

私は、華夷秩序は好みませんが、国民国家のように、なにもかも徹底的に論理化して、明確に線引きするのではなく、異なる秩序のあり方を認めた点は、なかなか面白いと思います。「夷」が「華」になったという事情があるからでしょうが、この柔軟さと緩やかさはとても示唆的です。このような華夷秩序の世界は、しかし、19世紀に西欧列強とぶつかることになりました。

それでは、日本は西欧近代にどのように対応したのでしょうか。岸本先生は、宗教に対する態度に着目して、この問題を検討されました。

明治維新に入る前に江戸時代について確認されました。それによれば、幕府はキリスト教を大変警戒していました。鎖国制度を採用したほか、寺社行政

を確立し、「本末制度」や「寺檀制度」、「宗門改め」などを通して、キリスト教を信仰する者が出ないようになりました。

幕末から明治維新にかけても、警戒心は緩むどころか一層強まりました。キリスト教の背後に欧米列強の植民地化の意思を見たからです。強烈な危機意識は尊攘志士にも共有されていました。ここにあるのは「心を奪うキリスト教」という理解です。その脅威に対抗するために「強い精神的な一体性を創出しなければならない」という認識が生まれました。

しかし、キリスト教対策だけが宗教政策ではありません。江戸時代、幕府は民衆の宗教生活の内面にまで踏み込んで支配しようとはしませんでした。しかし、諸藩は違いました。民衆の信仰世界を解体し再編成して、藩の支配秩序を強化しようとしたからです。この動きは明治政府の国家神道創設の動きに重なります。安丸良夫さんは、政府の「神道国教化政策」を取り上げて、この政策が「仏教を排し、伊勢神宮と宮中祭祀を頂点においた整然たる神社の階層秩序をつくりあげ、神道によって国民の宗教生活を掌握することでイデオロギー的統合を図ろうとするもの」だった²¹、と述べています。つまり、明治政府は、国家神道によって、民衆の信仰世界を変容させつつ取り込んで「強い精神的な一体性」を創出しようとしたのです。

「神道国教化政策」自体は失敗に終わりましたが、国家神道の試みは、宗教（性）を利用した国民統合の1つだといえます。是非はおくとして、国民意識の形成において、宗教（性）は重要な役割を期待されたのです。

「東アジアと近代」をまとめれば、東アジアは西欧近代とは全く異なる秩序観をもった世界でした。中国にとって、西欧近代との出会いは辛く痛ましい経験になりました。日本の場合、天皇を中心とする国家神道に国民統合を委ねて国民国家を形成しました。それが強い国力を生み出したのですが、結果は、ご存知の通り、悲惨なことになりました。

(5) グローバリゼーションと社会的包摂

最後のパートは「グローバリゼーションと社会的包摂」です。どちらも定義しにくい概念ですので、「序説」に必要な限りで、内容を確認してみます。

まずはグローバリゼーションです。この言葉は、1980年代から90年代以降に用いられるようになりました。グローバリゼーションは、経済・政治・文化・社会・メディアなど、あらゆる分野に関わる現象です²²。定義を含めてきちんと整理するのは、と

ても私の手に負えませんので、とりあえず、わかりやすい特徴を挙げてみます²³。

1つ目は、人・資本・モノ・情報など、移動のスピードが著しく速くなったことです。例えば、パリに行こうとすると、飛行機の利用が一般化するまでは、船を使って35日から40日くらいかかりました。私たちは飛行機でほんの12時間です。また、私が留学した1980年代には、パリまで書類を送るのに、航空便を使っても最低4日はかかりました。何をするにも時間がかかったのです。それが今では、メール送信すれば、世界のどこでも瞬時に届きます。

これは、人びとを隔てていた空間と距離が大きな障害ではなくなったことを意味しています。世界はぐっと縮みました。これが2つ目です。

さらにいえば、情報の場合が最もわかりやすいのですが、空間的な境界だけでなく、政治的なものを含めて様々な境界を易々と越えていきます。その結果、様々なものが容易に結びつき、依存し合う関係になりました。これが3つ目です。

よくグローバリゼーションによって均質化が進んでいるといわれますが、その反面で、異質化や多様化も生じています。というのは、選択肢が無数に増えて、誰でも、様々な要素を、本来のものから切り離して、自由に組み合わせることができるようになったからです。これは新しく何か生まれる可能性をもたらしました。と同時に、貴重な何かを見失ったり、壊したりする危険性もあります。それでも2つの側面は表裏一体ですので、都合よく切り離すというわけにはいきません。これが4つ目です。ギンナン先生が伝えようとしたのは、この点でしょう。

佐々木先生の「視覚メディアにおけるイメージの闘争」もこの文脈で理解できるように思います。実際には、ありふれた祭りの中に、「郊外のイメージ」を含めて様々なものの混淆がある。それを単一の視点から切り取るのではなく、多面性・多義性を映し出したい、残したい、ということです。これもまた、グローバリゼーションの時代への1つの対応の仕方といえるでしょう。

次に社会的排除と包摂²⁴です。「社会的排除」は、1980年代にフランスで登場し、90年代に本格的に用いられるようになったのですが、「貧困」とどこが違うのでしょうか。なぜ「社会的」という形容詞をつけているのでしょうか。それは貧しくて生活できないというだけでなく、社会との関わりを失って、人として存在できなくなっていることに着目したからです。社会の在り方自体が社会との関わりを失わせているという指摘もあります。そのため経済的に生

活を立て直すだけでなく、社会との具体的な関わりを取り戻さなければなりません。「社会的包摂」にはこのような含みがあります。

川井田先生が「個人に着目した多面的な支援」とか「当事者の精神面でのケア」を強調されたのは、このためです。「一人ひとり」が社会との具体的な関わりを取り戻すことが欠かせないのです。事例として紹介された「ストリート・ワイズ・オペラ」「ピアザ・グランデ」「コルム」は、貧困状態に陥ったホームレスや仕事のない労働者に、顔を合わせることでできる場を用意して、みんなで身体や声を使って表現することができるような機会を設けています。集まる場、すなわち「居場所」があること、身体を動かして人と関わるのが重要なのです。それが気持ちを立て直して社会との関わりを取り戻す第一歩になるということでしょう。

木野先生の紹介されたイギリスのコミュニティ・ダンスにも同じことが確認できます。ダンスのために集まって、身体を動かすことで、異質な文化や習慣、様々な立場の人々をつないでいこうという発想です。ここには「社会問題解決のためにダンスを利用する」という視点があるそうですが、私はこのとき紹介された「ビッグダンス」には「国民統合」の側面もあるように思いました。

興味深かったのは、ヴォルフガング・シュタンゲの試みです。誰もが自分のなかにもっている創造性を表に出して、ともに楽しむ。それぞれのもつ美をともに分かち合う。そうすることで自分も大切な人間だという自信をもつ、ということでした。このお話を聴いて、奈良の「たんぼぼの家」の「エーブル・アート」や「わたぼうし音楽祭」を思い出しました。同じところを見ているように思います²⁵。

ここで筒井先生の紹介された「あさいますお」さんについて考えてみたいと思います。目を引いたのは次の言葉です。「スマートで何でもわかっちゃってる優等生思想よりも、ゼロ次元の素朴で誠実な生活者のぶきっちょでどろくさい思想の方により強烈な何かがある。」「ゼロ次元」とは、垂直的な関係のない世界ということでしょうか。「あさいますお」さんは生活者の思想を前提に考え、試行錯誤の末に縄文に着目しました。縄文祭での逆立ちした奇妙な格好は、彼の理解を象徴的に示しているように思います。目を向けるべきは「始原」、すなわち、事の始まり、根源だ、ということでしょう。

ここで私は、狩猟採集生活を思い浮かべました。数十万年にも及ぶ長い年月のなかで、自然から食べ物を得て命をつないでいくために、人間は自然と向

き合い、自然の微妙な変化を捉える鋭く繊細なまなざしをもっていたに違いありません。また、強力な野生動物の犠牲になることもあったでしょう。怪我をするだけでも、場合によっては一巻の終わりですから、身を守るために全身で周囲の気配を感じ取ろうとしたと思います。そのような人々にとって自然や命はどのように感じられたのでしょうか。「あさいますお」さんは「下部へ、下部へ」向かって、最後に、縄文に、すなわち「いのちの根源」に行き着いたのではないのでしょうか。

(6) おわりに

それでは、最後に、今がどういう時代なのか、考えてみます。グローバリゼーションも社会的包摂も、登場したのは1980年代から90年代です。福祉国家の破綻がはっきりしたのも同じ頃です。因みに、日本で「地域」という言葉が一般に広く用いられるようになったのは、80年代からだといわれています²⁶。不思議な一致ですが、これはどういうわけでしょうか。

一言で言ってしまうと、近代世界システム形成以来の「中核」、すなわち、先進国が世界の富を独占する時代が終わったのです。それまでは、富の独占を前提にして、国民国家の枠組みの中で、経済や社会の仕組みや諸々の制度をつくり、社会基盤の整備や社会保障制度の拡大などを進めてきました。豊かな生活が保障されたかに見えました。しかし、独占が終了して築いてきた基盤を維持できなくなりました。さらに、経済発展を遂げる「新興国」や「途上国」との大競争の時代に突入して、低価格競争を余儀なくされるようになりました。その結果、コストダウンのために、海外への工場移転や非正規雇用の広がり、社会保障の切り下げ、増税など、今や先進国の暮らしは悪化しつつあります。これまでのような諸関係の結び方では生活ができなくなっているのです²⁷。

私たちは今、「これからどう生きるのか」、「どのような経済と社会の在り方を目指すのか」という重い問いを突きつけられているのです。この問いを視野に入れて、これから「自然と人間の関係」をはじめとして、様々なものとどのような関係を結んでいくのか、考えていかなければなりません²⁸。本年度の「国際地域文化序説」は、このような問題意識を歴史的な背景を含めて確認する場になったのではないのでしょうか。

2017年度国際地域文化序説授業計画(火曜3限)

| | | |
|-----|-------|---------------------------------------|
| 1. | 10/3 | オリエンテーション(岸本覚、柳原邦光) |
| 2. | 10/10 | 「自然環境と人」(中原計) |
| 3. | 10/17 | 「遊動と定住の人類史」(高田健一) |
| 4. | 10/24 | 「古典の中の漢文化—『源氏物語』桐壺巻を事例に—」(久保堅一) |
| 5. | 10/31 | 「近代世界システムと国民国家」(柳原邦光) |
| 6. | 11/7 | 「東中欧地域の小国チェコにおける『スラヴ・ルネサンス』」(内藤久子) |
| 7. | 11/14 | 「宗教と世俗化」(中朋美) |
| 8. | 11/28 | 「美術史の形成と現在」(筒井宏樹) |
| 9. | 12/5 | 「近世の東アジア世界」(柳静我) |
| 10. | 12/12 | 「日本の近代化と宗教—西欧近代の到来と日本の反応」(岸本覚) |
| 11. | 12/19 | 「グローバリゼーションの功罪」(ギンナン・アレクサンダー・コウジ) |
| 12. | 12/26 | 「グローバリゼーションによる文化の変容とその記録」(佐々木友輔) |
| 13. | 1/16 | 「イギリスにおける文化政策としてのコミュニティダンスの広まり」(木野彩子) |
| ※ | 1/20 | 地域文化調査成果発表会(5階講義室) |
| 14. | 1/23 | 「文化芸術と社会的包摂—欧州の事例から」(川井田祥子) |
| 15. | 1/30 | 「総括」(柳原邦光) |

【評価方法】

| | |
|---|--|
| ・ | 授業ごとの評価 講義/10分小テスト:講義のなかで重要なポイントを記述する 2~14回(13回×5点=65点) |
| ・ | 地域文化調査成果発表会への参加 2018年1月20日(土)、感想文の提出(10点) |
| ・ | 「総括」を踏まえての小論:「講義全体から学ぶことができたことは何か」30分(25点) |
| ・ | 合計 100点 |

III. 「国際地域文化序説」の構想

2017年度「序説」はすでに述べたように4つのパートから構成されている。ここでは構成の意図を紹介したい。「序説」の授業プランは国際地域文化コースの教員が何度か協議しコース会議で正式に決定したものである。筆者の考えとびったり重なるわけではないが、協議に参加するにあたって、コースのあり方について筆者なりの構想があった。4つのパートはおおむね筆者の構想に近いので、あくまで個人

的な構想であるが、それを紹介することで授業構成の意図を説明したい。

筆者は地域学部創設以来「地域学を創る」ことに関わってきた。そのため国際地域文化コースのコンセプトを思い描くときも、「地域学」のなかに組み込むべきものとして、「地域学」の成果に依拠しつつ構想した²⁹。そのためコースの究極的な目標を「一人ひとりの生活と生の充実」においた。それを実現するためのアプローチとして、「〈わたし〉の今、ここ」からスタートして³⁰、視野を空間的・時間的に少しずつ広げていき、長期的な過去を含めて、大きな構造と関係性のなかで「〈わたし〉の生活と生」を捉え返し、「一人ひとりの生活と生の充実」を構想したいと考えた。空間的には、起点となるのは暮らしの場であるローカルな地域である。生活、すなわち足元から始めて、国家や社会に、さらには大きな地域に向き合うという発想である³¹。

大別すれば、アプローチは2つある。1つは土台ともいえるべき「自然と人の生活との関係」を長期的なタイムスパンで考えることから始めて、その関係を基盤として生まれた地域の文化(地域性)に、続いて様々な制度や社会のあり方との関係に、進んでいく。そうすることで、「〈わたし〉を支える基盤は何なのか、どのようにして「〈わたし〉の生活と生」が支えられてきたのかを理解する。

もう1つは、「〈わたし〉の生活と生」をさらに大きな構造や関係性のなかで考えることである。今日、世界のスタンダードとなっているのは、西欧近代の生み出した理念・諸原理・文化的特質である。たとえば、「個人の自由」「平等」「国民国家」「国民」「市民」「デモクラシー」「芸術」「宗教」「世俗化」「工業化」などである³²。また、国民国家の枠組みを超えて、経済的な世界システムやネットワーク、文化的世界といった広域的地域(mega-region)との関係を視野に入れて「〈わたし〉の生活と生」を考える。

最後にグローバリゼーションと多文化共生の問題である。それを含めて近現代社会の抱える様々な問題とそれを克服するための試みについて創造性などの観点から検討するのである³³。

以上の形で「〈わたし〉の生活と生」を捉えることで、「〈わたし〉の「まなざし」を時間的にも空間的にも深く広くするよう試みる。それは〈わたし〉の捉え方自体を自覚することでもある。このような知のあり方と様々な関係を結ぶ多様な事例とを学ぶことで、「一人ひとりの生活と生の充実」を実現するための具体的な方法を思い描くことができるようになるのではないか、と考えたのである。

さらに、「働きかける力」が必要である。言語能力や現場感覚、現地感覚である。地域や海外の現場・現地で活動する際に、その地の言語や文化、生活習慣などを高い壁と感じないで、一步を踏み出し、前向きに経験知と実践知を獲得し積み重ねていく能力である。もちろん、この点は教室での講義だけではどうにもならない。コースとして最も工夫が必要なところである³⁴。

以上を人材養成の観点でまとめれば、近現代社会の構造と文化的特質、グローバルな文化と芸術文化、生活文化など様々な文化の関係性、これらが生活においてもつ意味をよく理解して、日本を含む世界の様々な地域で、異質なものを互いに認めながら生活の質を高めるために実際に働きかけることのできる知識や技能、言語能力や現地感覚・現場感覚を身につけた人材を養成することに、国際地域文化コースの目標を設定したということである。教員の役割は、そのために必要な知と情報、機会と場を提供することである。

これは本稿の冒頭で紹介した国際地域文化コースのコンセプトそのものである。したがって、「自然と人間」「近代とは何か」「東アジアと近代」「グローバル化と社会的包摂」という2017年度「序説」の構成は、地域学と国際地域文化コースのコンセプトを踏まえて構想された、と筆者は考えている。

IV. 振り返りと次年度授業計画への提案

ここでは2017年度の「序説」を振り返るが、何とかやり終えて一安心したというのが率直な感想である。とくに筆者の場合、第15回の「総括」担当だったので、かなり悩んだ。学生たちは第14回まで聴講しても、内容をうまく整理できず、混乱しているかもしれない。なんとか授業全体を大きく捉えて、そのエッセンスを吸収してもらいたいが、実際には筆者も含めて教員にとっても容易ではない。

それで工夫をした。ただ講義を聴くのではなく、それぞれの教員の講義に合わせて、関係しそうな文献を読み進めたのである。そのため本稿にかなり長い註をつけることになった。註本来の役割のほかに、講義内容を理解し自分のものにするための方法の1つとして、その形と情報を残しておきたかったからである。受講者の一人として教員も講義から何かを吸収しようと思えば、それなりの努力が必要である。

このような観点から振り返ると、「序説」のようなオムニバスの授業では、学生たちの理解を容易にするためにコーディネーターを決めて、講義と講義との間のつながりを学生たちに簡潔に示した方がいい

だろう。なかなか難しい役割だが、すでに授業経験があるので2018年度は若干軽減されるはずである。

次に、細かいことだが、教員は学生たちが理解しやすいようにレジュメなど資料を配布すべきである。英語の映像を見せる場合は、ただ見せるのではなく、内容を細かく説明すべきである。

成績評価の方法については、「総括」を踏まえて「講義全体から学ぶことができたことは何か」を30分間で書くことを求めたが、これには無理があることがわかった。1つは「総括」を聴いてすぐに書くのは難しいこと、次に30分間では時間が足りないこと、そのため学生の答案を読んでも、どのように授業を受け止め理解したのかを判断しにくいこと、である。対策としては、「総括」の後、30分間程度、参加教員も含めて議論の時間を設けること、そして15回の授業終了後の試験期間に90分間の試験を行うことを提案したい。

授業内容については、これは筆者の「総括」の問題であるが、「国際」と「地域」について明確に語るべきだったと思う。それをここで記せば、以下のようになる。

授業名には確かに「国際」が入っているが、「総括」では“international”という捉え方をしていない。国家を基本的な単位とすることを敢えて避けたのである。「地域」の場合も、空間として“national”というよりも、“local”を、次に“regional”を重視している。

“local”は暮らしの場である。“region”は国内の地域をいう場合もあれば、グローバル・ヒストリーでいうところの、様々な国にまたがる広域的な地域(mega-region)という場合もある。要するに、固定した枠となるような「集団的なもの」や感覚的にすぐには捉えがたいものをいったん脇に置いて、身近なところから考えようとしたのである。

起点にしたのは「〈わたし〉の生活と生」である。そして目指すところは「一人ひとりの生活と生の充実」である。これを絶えず視野に入れながら「人はどのような関係を結んできたのか、結んでいくのか」を、時間的・空間的に、文化的に、考えることを提案したのである。そうすることで、「一人ひとり」が生きている「様々な関係の世界」のありようとその変化が捉え易くなるのではないだろうか。

このようなことを、わかりやすい、経験的で具体的な例を挙げつつ積み重ねていくことが、2018年度以降の課題になるのではないだろうか。

V. おわりに

新たな授業、それもたくさんの教員で行う授業を

立ち上げるのは容易なことではない。当然、うまくいかないこともある。悪戦苦闘は避けられない。それでも工夫を重ねていけば、何らかの「気づき」があり、手応えを感じとることができる。

筆者は「総括」に「人はどのような関係を結んで生きてきたのか」というタイトルをつけることになるとは思いもしなかった。コース教員の講義を聴き、文献を読みながら、またこれまで「地域学に形を与える」ために学び吸収してきたことを合わせて、率直に、シンプルに、考えたとき、「国際地域文化序説」も「関係」という視点から語ることができるのではないか、と思うようになったのである。

筆者のこれまでの地域学研究を振り返ると、「地域学総説」（地域学部3年次必修科目）が始まったのは、2006年度のことである。それ以来、毎年、10名くらいの教員が議論を重ね、試行錯誤を繰り返しながら、学生たちに今日的な意義のある何かを伝えるために、そして「地域学の確立」のために、奮闘してきた。なぜそれができたのか、あの熱意はどこから生まれたのか、私たちが衝き動かしたのは何だったのか、今思えば、不思議である。

筆者は、スタートしてすぐに「これは記録に残すべきだ」と直感した。それで「地域学の挑戦」や「地域学を創る」というタイトルでシリーズ化して、授業の内容とともに成果や新たな論点を論考にまとめて、『地域学論集』に掲載してきた。「挑戦」と「創る」をタイトルにしたのは、スタート時の意欲と思いを表現しただけである。その甲斐あって地域学を語るできるようになったが、頑張ってきた教員たちの多くは定年退職や移動などで次々と学部を去ってしまった。しかし、その穴を埋めるように、若くて活力ある教員たちが加わって、「地域学の確立」に向けた努力は力強く続いている。

「国際地域文化序説」はまだ一步を踏み出したに過ぎないが、「地域学総説」と同じような場になるのではないかと期待している。将来の成果を楽しみにして、ひとまず本稿を終えることにしよう。

註

- 1 柳原邦光/光多長温/家中茂/仲野誠編著、2011、『地域学入門』ミネルヴァ書房、現在、4刷。
- 2 西田正規、2007、『人類史のなかの定住革命』講談社、参照。次の文献は遊動社会の生活と定住生活との違いや、生存について簡潔に説得的に説明している。西田正規、2010、「定住社会を考える」、中路正恒編、『地域学への招待』角川学芸出版。
- 3 ユヴァル・ノア・ハラリ（柴田裕之訳）、2017（2016）、『サピエンス全史（上）—文明の構造と人類の幸福』河出書房新社。特に「第3章 狩猟採集民の豊かな暮らし」と「第5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇」を参照。このほか、佐藤洋一郎、2016、『食の人類史—ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』中央公論社は、「生きるとはどういうことか」を「食べる」ことから考える上で大変参考になる。
- 4 気候変動と農耕開始の問題については、中川毅、2017、『人類と気候の10万年史—過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか』講談社が参考になる。とくに「第7章 激動の気候史を生き抜いた人類」では、気候変動との関係から狩猟採集生活と農耕生活の利点と問題点を理論的に検討している。
- 5 岡本卓、2013、『本当は怖い「糖質制限」』祥伝社、68-76頁。
- 6 ハラリ：59-61頁。
- 7 植田今日子さんが取り上げているのは、宮城県気仙沼市唐桑町の舞根集落である。この集落では、52軒中、44軒の家屋が津波で流出し、4名の死者を出したが、被災後、ほとんど時をおかずに集団移転について検討している。その結果、移転先の条件としたのは、津波を免れた8軒の家屋がある舞根の土地で、海が見える場所である。そして、集落と海とを隔てる9.9メートルの防潮堤建設に断乎反対した。植田今日子、2012、「なぜ被災者が津波常習地へと帰るのか—気仙沼市唐桑町海難史のなかの津波」、環境社会学研究』第18号。同「第六章 津波を引き受ける村」、植田今日子、2016、『存続の岐路に立つ村』昭和堂。このほか、金菱清、2016、『震災学入門—死生観からの社会思想』ちくま新書も同様の問題を論じている。
- 8 内山節、2011、『文明の災禍』新潮社。特に「序章 供養—死者と向き合う」と「第1章 衝撃—自然の災禍、文明の災禍」を参照。
- 9 深層の歴史については、フェルナン・ブローデルの見解がとても参考になる。「私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣（l'habitude）—慣習的行動（la routine）と言うほうがいいかもしれない—そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということはなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起こっている。人間は腰の上まで日常性の中に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものが、われわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、

- 生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。こうした行為を行なわしめる刺激、衝動、規範、様式、あるいは義務は、われわれが思っている以上に多くの場合、人類史の起源にまで遡るのである。非常に古く、しかもなお生き生きとした何世紀をも経た過去が、アマゾン川が大量の濁水を大西洋に流し込んでゆくように、現在という時間の中に流れ込んでいるのである。」フェルナン・ブローデル、1995、『歴史入門』太田出版、18-19頁。このほかに、フェルナン・ブローデル、1989、「長期持続—歴史と社会科学—」、『フェルナン・ブローデル [1902-1985]』新評論を参照。具体的な研究としては、カルロ・ギンズブルグ、1992、『闇の歴史—サバトの解説』せりか書房を参照。
- 10 内山節、1998、「序 新しい時代にむけて新しい思想を」、内山節・大熊孝・鬼頭秀一・木村茂光・榛村純一、『ローカルな思想を創る』、農村文化協会、15-19頁参照。
- 11 イマニュエル・ウォーラステイン、2008、『ヨーロッパの普遍主義—近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辭学』明石書店を参照。
- 12 フランス革命では、様々な規制のもとにあった「所有」と「労働」もまた「解放」されて、「自由な所有」と「自由な労働」になり、人々の生存は「すべての人」がその形成に参加すると想定された一般意思の現れである「法」の下で確保されることになった。生活を支えるだけの財産もなく、歳をとって働けなくなった人、仕事がなく働けない人など、生存が危機にさらされている人に援助の手を差し伸べるのは国家の責任であると考えられた（生存権保障）。波多野敏、2016、『生存権の困難—フランス革命における近代国家の形成と公的な扶助』勁草書房、113-114頁。
- 13 古い文献であるが、Albert Mathiez, *Les origines des cultes révolutionnaires (1789-1792)*, Paris, 1904, pp. 14-15. を参照。この文献は社会学者である杉本隆司氏によって翻訳出版された。アルベール・マチエ、2012、『革命宗教の起源』白水社。
- 14 啓蒙思想については、ロイ・ポーター、2004、『啓蒙主義』岩波書店と、ツヴェタン・トドロフ、2008、『啓蒙の精神』法政大学出版局、ジョナサン・イスラエル、2017、『精神の革命—急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』みすず書房を参照。
- 15 世俗化論の概要については、山中弘、2006、「世俗化論争と教会—ウィルソン世俗化論を手がかりにして」、竹沢尚一郎編、『宗教とモダニティ』世界思想社を参照。このほかに、世俗化の理論とその歴史、宗教と「宗教的なもの」の今日的な意義については、ジャン=ポール・ヴィレーム（林伸一郎訳）、2007、『宗教社会学入門』白水社を参照。特に「第4章 宗教と近代（モダニティ—世俗化の議論—」が参考になる。ヴィレームは、今日を近代という時代の徹底化・普遍化局面にあるとして、これを「超近代」（アンソニー・ギデンズなどのいう「後期近代」）と表現し、宗教的なものの社会的・文化的再評価（「宗教的なものの再構成」）が進行しているとす。そして「超近代という局面で再構成される宗教は、ただ個人に関わるだけでなく、また、倫理的、文化的レベルで社会システムにもかかわっている」という。136-139頁、142-143頁。
- 16 メレディス・B・マクガイア、2008、『宗教社会学—宗教と社会のダイナミズム』明石書店を参照。特に「第8章 現代世界の宗教」が参考になる。マクガイアは、「宗教社会学の4つの物語」として、「世俗化」、「宗教の再組織化」、「宗教の個人化」、「宗教市場における供給サイド」を紹介し、最後に「物語を超えて」で、宗教とグローバル化の関係についても言及している。424-446頁。
- 17 詳しくは、ジャン=ポール・ヴィレーム、2009、「超近代（ultramodernité）の文脈における宗教」、ジャン・ボベロ、門脇健編著『揺れ動く死と生』晃洋書房、参照。
- 18 比較憲法学会編、2006、『信教の自由をめぐる国家と宗教共同体—国際比較憲法会議 2005年報告書—』政光ブリプラン。このほかに、シルヴィオ・フェラリ（高畑英一郎訳）、2003、「ヨーロッパ型政教関係について」、『日本法学』第69号第2号と、Commission de réflexion sur l'Application du principe de laïcité dans la République, *Rapport au Président de la République, Remis le 11 décembre 2003.*を参照。
- 19 たとえば、宗教のもつ統合的役割に着目し、近代社会において「人々を互いに結びつける絆は何なのか」を終生の研究テーマとした社会学者エミール・デュルケムについて、宮島喬は概ね以下のようにまとめている。デュルケムにとって、近代社会の目的は個人の人格と自由・個人の尊厳という価値を実現し擁護することであり、この価値は社会的統合の唯一の原理でもあった。デュルケムは、個人主義の理念（人間崇拝）を、個人の人格とその思想の自由を擁護する原理とする一方で、人々の結束を促す唯一の核である普遍的・集合的規範として定式化しようとした。宮島喬、1977、『デュルケム社会理論の研究』東京大学出版会。特に「第2章 個人と社会—デュルケムにおける『個人主義』の問題—」を参照。また、ユルゲン・ハーバマスとヨーゼフ・ラツィンガー枢機卿（前のローマ教皇ベネディクト16世）は、2004年に行われた「自由な国家における政治以前の道徳的基盤」をテーマとする対話において、「世俗化された西側社会はどのような基盤の上に成り立っているか」という「人間の尊厳にふさわしい社会の基

- 礎づけをめぐる問題」について論じている。フロリアン・シュラー編(三島憲一訳)、2007、『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』岩波書店。
- 20 川北稔、2016、『世界システム論講義—ヨーロッパと近代世界』筑摩書房、223-224頁、243-245頁。
- 21 <http://japanknowledge.com/lib/display/?kw> 世界大百科事典の「国家神道」の項目(安丸良夫執筆)を参照。安丸良夫はこの点についてやや詳しく次のように説明している。「伊勢神宮から村々の氏神までの、天皇から戦死した庶民にいたるまでの、こうした整序された神々の世界は、幕藩体制下においては権力の具体的な掌握の対象にはなっていなかった民衆の来世観や信仰の世界を、国家の政治的レベルの秩序のなかへ統合しようとするものであった。それは、たしかに日本人の霊魂観や来世観と無縁なものではなかったが、しかし、天皇制国家という政治作品のうちへ、日本人の内面的世界のすべてをとらえこもうとする恐ろしく尊大な企画であった。」安丸良夫、2007、『日本ナショナリズムの前後—国家・民衆・宗教』洋泉社、61頁。ほかに、安丸良夫、2011(1979)、『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈—』岩波書店を参照。
- 22 グローバリゼーションの全体像を知るには、次の文献が便利である。ジャン=クロード・リュアノ=ボルバラン、シルヴァン・アルマン、2004、『グローバリゼーションの基礎知識』作品社、マンフレッド・B・ステイガー、2007(2005)、『グローバリゼーション』岩波書店。
- 23 “Stanford Encyclopedia of Philosophy: Globalization”, First published Fri Jun 21, 2002; substantive revision Tue Jun 10, 2014, <https://plato.stanford.edu/entries/globalization/> 閲覧日 2018年1月25日。
- 24 社会的排除/包摂と日本の社会問題との関係については、福原宏幸、2010(2007)、「序『社会的排除/包摂』は社会政策のキーワードになりうるか?」、福原宏幸編『社会的排除/包摂と社会政策』法律文化社、1-3頁に簡潔にまとめられている。また、同書に掲載されている福原宏幸「第1章 社会的排除/包摂論の現在と展望—パラダイム・『言説』をめぐる議論を中心に」は、ヨーロッパにおける議論の全体像を紹介しており、理論的理解を深めるには最適である。このほかに以下の文献が参考になる。阿部彩、2011、『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社、岩田正美、2008、『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣。
- 25 柳原邦光、2018、「地域学入門」、『地域学論集』第14巻第2号、39-40頁参照。
- 26 「地方」に代わって「地域」が用いられるようになるのは、1980年代半ば以降のことである。赤坂憲雄、2010、『婆のいざない—地域学へ』柏書房、213頁。
- 27 この部分の記述は内山節の見解に従っている。内山は中世史家である網野義彦の「縁」を援用しながら、戦後日本社会について、それまでの「縁」を断ち切って(無縁)、新たに縁を結ぶこと(有縁)で成立したと説明している。高度経済成長期に結ばれた新しい「縁」とは、企業との「縁」、国との「縁」(国による経済成長の推進、社会保障、社会保険制度など)、市場との「縁」(消費による豊かさ)である。企業や国家の支えがあれば、コミュニティや地域などなくても個人として生きられる時代が現われた。ところが、今日の市場経済のあり方はこれらの「縁」の有効性を失わせ、今や「無縁」社会になりつつある。なぜなら3つの縁を成り立たせた前提が失われたからである、と内山はいう。内山のいう前提とは、本文で紹介した先進国の基盤の崩壊である。内山節、2015、「序章 いま、どんな変化が起こっているのか」、内山節、『半市場経済—成長だけでない「共創社会」の時代』KADOKAWA、13-20頁。
- 28 歴史学の分野では、新しい視点に立った「グローバル・ヒストリー」が現われた。水島司によれば、近代という時代が領域性を基盤とする国民国家システムの地球大への拡大とともに展開したことから、従来の歴史学は国家形成や国民統合のプロセスなど一国的な枠組みで歴史を捉えがちであったが、今日では関係性を重視した「グローバル・ヒストリー」が大きな潮流になりつつある。水島は「グローバル・ヒストリー」の特徴として5点を挙げている。①あつかう時間の長さ(歴史を巨視的に見て、数世紀にも及ぶ長期的な歴史動向を論じる)、②テーマの幅広さと空間の広さ(ユーラシア大陸やインド洋世界などの陸域や海域)、③ヨーロッパ世界とその役割の相対化(近代以降のヨーロッパの歴史的な役割や先進性の再検討、非ヨーロッパ世界の歴史と発展の重視)、④異なる諸地域間の相互連関、相互影響の重視、⑤疫病、環境、人口、生活水準など、人々の日常に近く、社会全体や歴史変動のあり方全般に関わる諸問題をテーマに加えたこと、である。そして、グローバル・ヒストリーの課題を次のように述べている。「人びとが求めている共同性は、エスニシティ運動が求めるような領域の再線引きによる新たな国民国家の誕生が満足させるようなものではありえないだろう。新たなありうべき人と人との関係のあり方を何を基盤にしてどう築くのが問われているのである。」水島司、2010、『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、1-8頁。
- 29 筆者の地域学理解については、以下の論考を参照。柳原邦光、2015、「地域学を創る3—地域学とボランティア学—」、『地域学論集』第12巻第1号。同、2017、「地域学

講義』、『地域学論集』第14巻第1号。同、2018、「地域学入門」、『地域学論集』第14巻第2号。

- 30 基本的な考え方について、詳しくは『地域学入門』第3章から第5章を参照。
- 31 この点については、内山節の以下の指摘から着想を得た。「大きな世界から小さな世界への視点の移行がすすんだ。(中略)もちろん、人間たちは、大きな世界のことを考えなくなったわけではない。最初に一歩として大きな世界に足をかけるのか、それとも小さな世界に足をかけるのかを、変えただけである。まず最初に大きな世界を構想し、その大きな世界との関係で小さな世界を考える発想から、自分たちが暮らし、責任のもてる小さな世界をそれぞれが創りながら、その小さなネットワークとして、大きな世界をもみていこうという発想へ、転換しはじめたのである。」内山節、2005、『「里」という思想』新潮社、101頁。
- 32 「後期近代」といわれる「今」とはどういう時代なのか、わたしたちが無意識のうちにどのような価値観や発想の仕方をもって生き行動しているのか、から考える。
- 33 現代社会で争点になっているのは何か、どのような取り組みや工夫がなされているかを学び、そこからどのように働きかければいいのか、共にできるものは何かを考える。
- 34 地域学部では「海外フィールド演習」を単位化して、学生の海外体験をバックアップしている。関係教員の努力の成果が中朋美ほか編、2017、『インターローカルつながる地域と海外』筑波書房の出版である。東アジアを対象とする試みとしては「東アジアプロジェクト」がある。これについては、柳静我・柳原邦光、2017、『東アジアプログラム』と東アジア『越境人』の育成』『地域学論集』第13巻第3号を参照。

